

林

8

2026  
No.233

里



特集

里山広葉樹林の  
利活用と再生

# 令和8年 緑化推進運動功労者内閣総理大臣表彰

## 受賞者 紹介

緑化推進運動功労者内閣総理大臣表彰とは、緑化推進運動の実施について、顕著な功績のあった個人又は団体に対し、内閣総理大臣が表彰を行うものです。  
令和8年は13の個人・団体が受賞されました。本誌では毎号、受賞者の方々をご紹介します。

## 西東京 自然を見つめる会（東京都西東京市）

同会は、次世代に豊かな自然を引き継ぐことを目的として設立された市民ボランティア団体であり、地域の植物公園の維持管理を行うほか、様々な活動を実施しています。

地域住民に地域の樹木への親しみを深めてもらうため、公募により選定された50本の樹木を「西東京市の木50選」として紹介し、これらを巡る「西東京の木50選を訪ねる会」を開催しています。また、地元自治体と協働して設定した「みどりの散策路」のマップ作成やガイド付き散策会、自然観察会の開催など自然に親しむ機会を広く提供しています。

これらの取組は、地域住民が自然と触れ合う機会を創出し、地域の緑化推進のみならず森林環境教育や緑化意識の普及啓発にも大きく貢献しています。



▲ 西東京市の木50選の樹木(エノキ)と会員の皆さん



▲ みどりの散策路のガイド付き散策会



▲ 自然観察会

過去の受賞者については林野庁ウェブサイトをご覧ください。

[https://www.rinya.maff.go.jp/j/sanson\\_ryokka/hyosyo/con1.html](https://www.rinya.maff.go.jp/j/sanson_ryokka/hyosyo/con1.html)



人と森をつなぐ情報誌



表紙の写真：木炭（左上）、飛騨地域の小径ブナ材を使ったアーム  
チェア（右上）写真提供：飛騨産業株式会社、ウダイカンバ（下）



<https://www.contactus.maff.go.jp/rinya/form/kouhou/202608.html>

## Contents

- 03 特集 里山広葉樹林の利活用と再生
- 08 TOPICS 01 森業キックオフ・フォーラム大盛況！
- 10 TOPICS 02 松くい虫被害対策の今
- 12 TOPICS 03 森林関連情報のオープンデータを公開しました
- 14 海外・現場最前線からの便り 「常緑の州（the Evergreen State）」ワシントン州シアトルでの勤務
- 16 国有林野事業の取組 ICTを活用した林業の省力化に向けて ～「宮北署ICT推進室」～
- 18 TOPICS 04 NFI第5期の調査結果について
- 19 みどりの大使が行く！ チェーンソー講習



特集

# 里山広葉樹林の 利活用と再生

コナラやクヌギなどからなる里山広葉樹林は、  
森林に暮らす多くの生き物の食べものや住みかとなり、日本の豊かな森林の生態系を支えています。  
木材としても広葉樹材は、色合いや硬さなどが多様で、私たちの暮らしの身近なところで使われています。  
しかし今、里山広葉樹林では手入れ不足や放置が進行し、様々な問題が起きています。

このような状況を踏まえ、林野庁では令和6年度から職員有志の「里山広葉樹利活用推進チーム  
(以下「広葉樹チーム」)」により、その利活用と再生に向けた活動を行っています。

この特集では、里山広葉樹林をめぐる現状や課題、広葉樹チームの取組などを紹介します。

広葉樹の取組について▶

<https://www.rinya.maff.go.jp/j/keikaku/kouyouzyu.html>

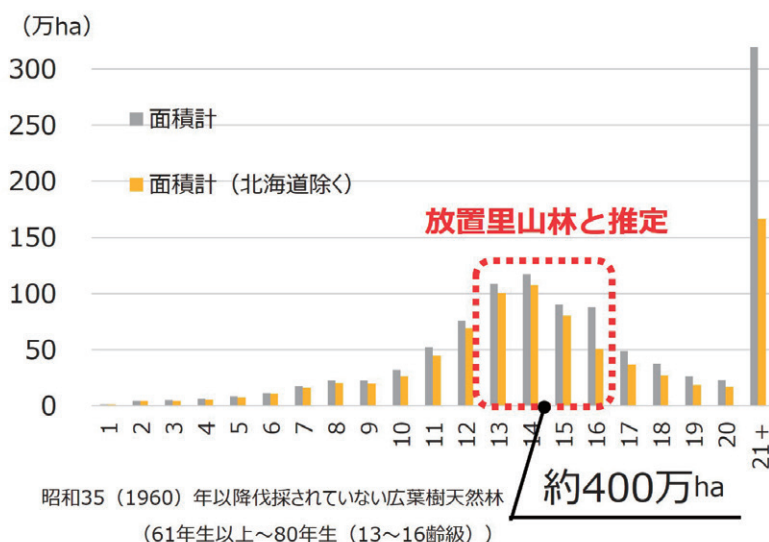


## 里山広葉樹をめぐる 現状や課題

里山林は、かつて薪炭林として利用され、人の活動によってその生態系が維持されてきました。里山林を代表するコナラやクヌギは、伐採後に切り株から再び芽が出る「萌芽更新」が可能な樹種です。約20年という短いサイクルで伐採と再生を繰り返すことで、林内には適度な光が差し込み、明るい環境を好む昆虫や草花が生息し、里山特有の生態系が維持されてきました。

しかし、昭和30年代以降の燃料革命で薪炭などの需要が激減したことや人口流出などにより、管理されずに高齢化・大径化した森林が増加しています。こうした放置された里山林の面積は、全国で約400万haにのぼると推計され、スギ、ヒノキなどの人工林面積約1,000万haと比較しても無視できない広さです。人の入らない里山林が増えてきた結果、ナラ枯れや人と野生動物の軋轢の増加、竹林の侵入拡大などにつながり、国土保全や生物多様性保全などの森林の公益的機能の低下が懸念されています。

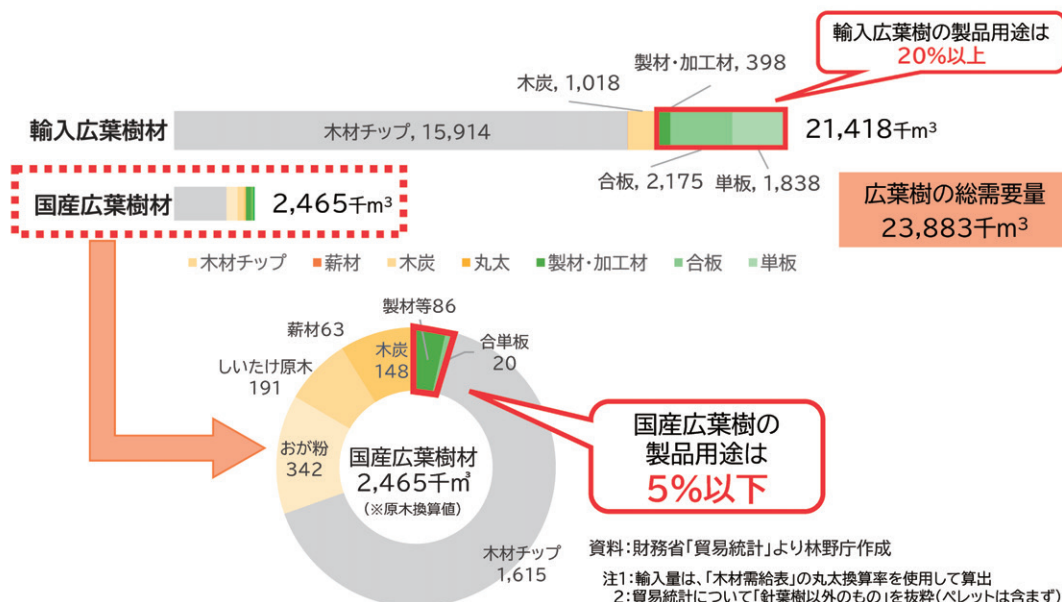
放置里山林の面積の推計（出典：林野庁「森林資源の現況」）



他方、木材として広葉樹材は、樹種ごとに木目や色合い、強度や重さなどの性質、資源量が多様であり、それぞれの性質に応じて国民生活に関わる様々な用途で利用されています。例えば、家具、調理器具や食器、フローリング、楽器、スポーツ用品、ウイスキー樽、さらには薪・炭やきのこ生産資材など、住宅・住環境をはじめとして食や文化、エネルギー利用などまで多岐にわたりますが、現在その需要の多くを輸入に依存しています。

日本の広葉樹需要量は少なくとも年間約2,400万m<sup>3</sup>と推計され、うち国産材は約250万m<sup>3</sup>と1割程度に留まります。さらに、国産材の利用

日本の広葉樹の需要量（原木換算値）



用途の内訳を見ると、製紙用チップやおが粉などが大半で、家具をはじめとする付加価値の高い製品用途は5%以下と僅かです。つまり、日本の広葉樹資源は、高付加価値な利用に十分結びついていない状況です。

一方で、世界的な需要増や円安の影響等により、輸入広葉樹の価格は急騰しており、家具製造等の業界において国産広葉樹へのニーズが高まっています。

また近年は、SDGsやエシカル消費への関心の高まり、企業のESG投資への対応などを背景に、国産広葉樹について従来の樹材種だけでなく、これまで未利用だった樹種や小径木、虫害木などを積極的に活用しようとする動きが広がっています。例えば、北海道の旭川家具工業協同組合の扱う原料では、この10年間で北海道産広葉樹の割合が3割から8割へと上昇しています。

こうした需要側の動きを、供給側である里山広葉樹林の再生につなげていくためには、国産材の利用価値を高め、需要と供給を結び付ける仕組みづくりが重要です。

## 広葉樹チームの発足とこれまでの取組

林野庁では令和6年度に有志職員による広葉樹チームを結成し、有識者会議における提言に基づき、需要側と供給側の情報共有等を行う「里山広葉樹利活用・再生プラットフォーム」（仮称、以下「PF」）の設立に向けた準備を進めてきました。

令和7年度は、広葉樹の生産・流通・利用に関わる事業者等へのヒアリングとともに、その利活用と再生に向けた課題ごとに、**1 PF設立準備、2 資源量把握、3 支援**

策取りまとめ、**4 広報**の4つのテーマに分かれて活動を展開しました。

令和8年度は、川上から川下まで広葉樹に関わる多様な事業者を発起人とするPF設立準備協議会が立ち上がり、令和9年春に会員制の一般社団法人としてPFを設立することを目指して、具体的な団体の機能等の検討が進められています。

令和7年度からこれまでの主な取組についてご紹介します。

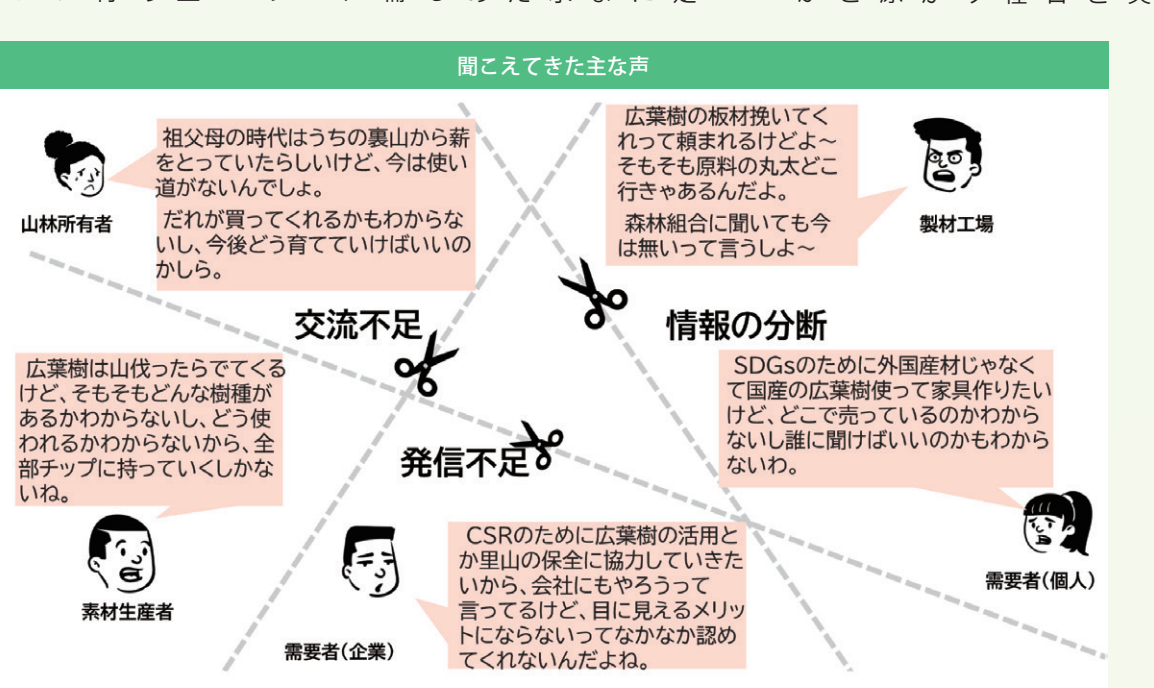
### ① 広葉樹に関わる事業者等へのヒアリング

広葉樹チームはこれまでに、北海道から九州まで広葉樹の生産・流通・利用に関わる合計80者以上の事業者、自治体や団体等へのヒアリングを実施しました。その結果、里山広葉樹の利活用に向けて、大きく3つの課題があることが分かりました。

1つ目は、「供給側と需要側の情報が遮断されている」ことです。林業を担う供給側では、全国の多くの地域でどの樹種のどのような規格（直径、長さ、欠点の有無等）の原木が、いくらで売れるのかといった情報をほとんど持っていない。また、各地域には広葉樹を主とした原木市場等の拠点が少ないことから、銘木級以外の広葉樹は付加価値の低いチップ用材として取り扱われているケースが多く見られました。一方、需要側の多く

の加工工場では、安定的に広葉樹を確保できる遠方の原木市場（北海道、岩手県、岐阜県など）から調達しており、供給側と需要側が地域内で十分に結びついていない実態も明らかになりました。

2つ目は、「供給側の実態と需要側が求める条件とのずれ」です。一般的に日本の広葉樹林は多様な樹種から構成され、伐採により様々な樹種・径級の原木が出材されます。これらの原木は、曲がりや虫食いなどの欠点も多様であることが通常であり、多品種・小ロットで供給されます。一方、需要側は、同じ樹種で一定規格以上の原木が安定的に供給されることを求めます。そのため、需要側が求める安定供給を実現するためには、一定量の原木を集めて仕分けを行う必要が生じるなど、供給側の特性と需要側の求める条件との間にギャップが存在しています。

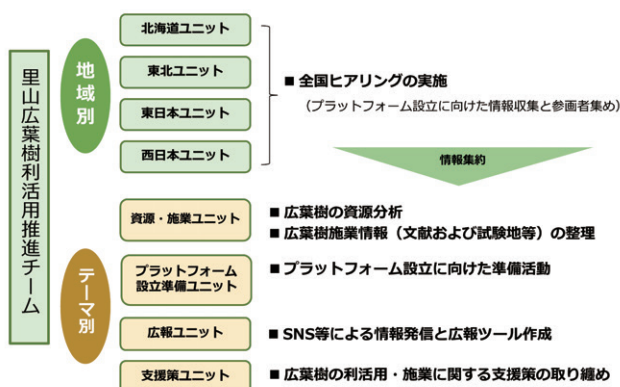


は非常に限られています。また、これまで針葉樹を中心に扱ってきた事業者が多いことから、広葉樹の伐採や製材加工に対応できる技術や設備を持つ事業者は一部に留まっています。

## 令和7年度の活動内容

里山広葉樹利活用推進チーム

- 里山広葉樹利活用推進チームは、林野庁の有志職員により令和6年度から活動を開始。
- 令和7年度は約30名の職員が所属し、以下の体制により各ユニットが活動を実施。



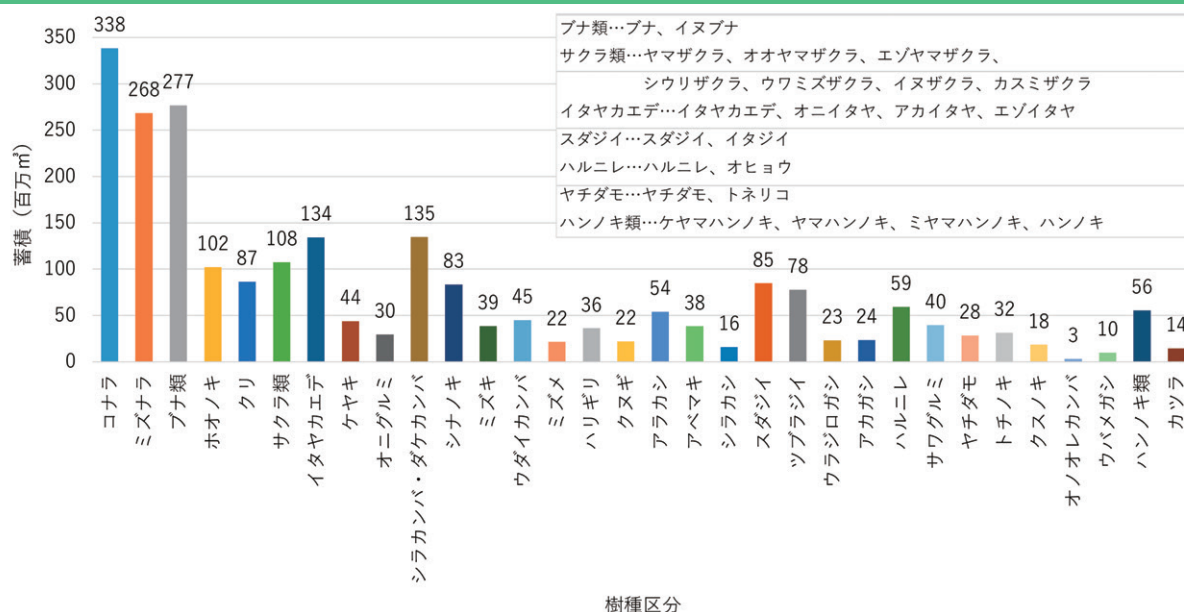
## (2) 国内の広葉樹資源量調査

広葉樹資源の活用を進める基礎情報として、地域の広葉樹資源量を把握することが重要です。このため林野庁広葉樹チームでは、森林生態系多様性基礎調査（NFI）の結果を活用し、全国の広葉樹資源量の分析を行いました。NFI※とは、全国の森林内に約4km間隔で調査プロットを設け、平成11年度から5年ごとに継続的に実施しているモニタリング調査です。※詳しくはP18を参照

この分析の結果、コナラが本州以西の広い範囲に分布し、推定蓄積量が最も多いことが分かりました。次いでミズナラ、ブナ類の蓄積量が多いものの、ミズナラは北日本と山地、ブナ類は東北を中心とした日本海側や山地に分布するなど、樹種ごとに分布の特徴が見られました。また、これらの樹種では、直径の大きな林分が多く存在することも確認されました。

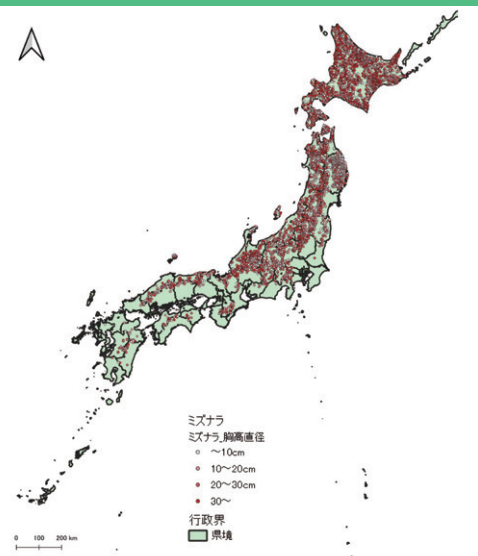
このように、広葉樹資源は地域ごとに分布する

樹種分類の全国の総蓄積量（推定）

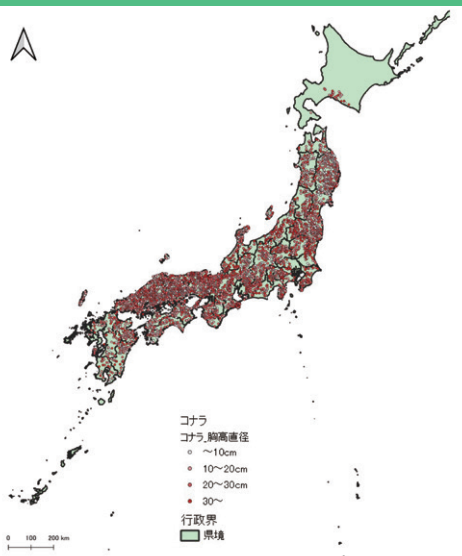


樹種や構成が異なり、それぞれの地域条件に応じた形で存在していることが明らかになりました。また、今回の分析では25年間

ミズナラの分布

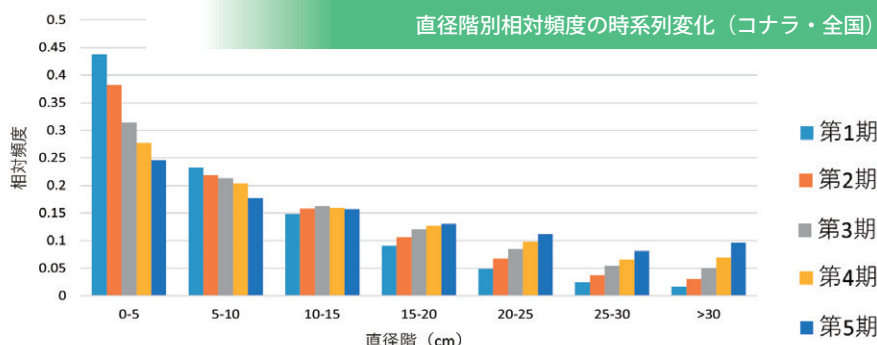


コナラの分布



の径級構成の推移も整理したところ、多くの樹種において、小径木が減少し、大径木の割合が増加する傾向が見られました。このような径級構成の推移は、資源の活用や再生のあり方を検討する上で重要な視点となります。

直径階別相対頻度の時系列変化（コナラ・全国）



なお、詳細な分析結果については、林野庁ウェブサイトに掲載しています。

森林生態系多様性基礎調査（NFI）に基づく広葉樹の資源量調査

[https://www.rinya.maff.go.jp/j/keikaku/kouyouzu/NFIRA\\_0.html](https://www.rinya.maff.go.jp/j/keikaku/kouyouzu/NFIRA_0.html)



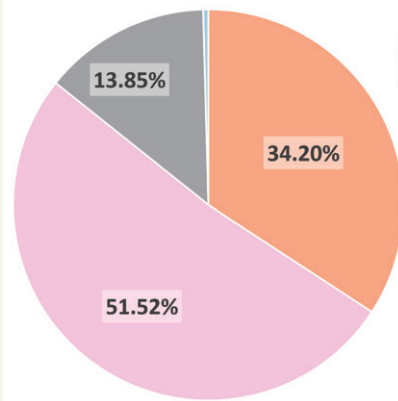
### (3) PF設立準備に向けた シンポジウムの開催

令和8年2月、里山広葉樹利活用推進シンポジウム『森の彩を暮らしへ』を開催しました。本シンポジウムは、PF構想のキックオフとして位置付けたものです。

対面とオンラインを合わせて事業者、関係団体、自治体等500名以上の参加があり、広葉樹の管理や利活用への関心の高さがうかがえました。

開催後に実施したアンケート（回答約230名）では、8割以上がPFの利用に関心を示しました。特に、需給情報の共有やサプライチェーンの構築、利活用の意義の発信といった機能への関心が高いことが分かりました。

シンポジウムに参加して、今後構築するプラットフォームを利用したいと思いましたか？  
(回答数:231)

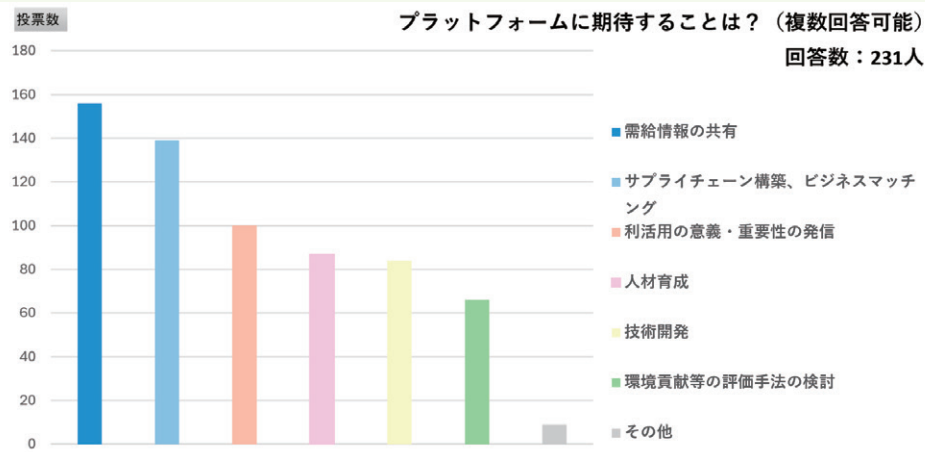


### PF設立に向けて

令和8年5月に開催された第1回PF設立準備協議会では、PFの設立趣旨や機能の概要が確認され、①広葉樹林について資源・環境・文化面などでの利活用・再生の価値の再定義、②供給者と需要者等の間の情報の分断解消、③小規模・分散的主体

プラットフォームに期待することは？（複数回答可能）

回答数：231人



でも参加できる取引・協働の場、④政策とビジネスをつなぐ橋渡し・情報発信を束ねる中間支援・調整役の機能を持たせることとなりました。また、今後は各ワーキンググループを通じて具体的な議論を進めていくことで一致しました。

PFが里山広葉樹林の利活用・再生に係る課題の解決につながる場になるためには、多様な関係者の参加が必要です。広葉樹林の所有者、木材の供給者や利用者等の皆様が参加したいと思える魅力的なPFとなるよう、その内容について検討が進められます。今後の進捗についても林野庁からウェブサイト掲載やメール配信により広く発信していきます。メール配信をご希望の方は次のforms（リンク）でご登録ください。

【林野庁広葉樹チーム】  
広葉樹ニュースレター



[https://forms.office.com/pages/responsepage.aspx?id=\\_6DKBnJlIqyMEVxNhtROCS-r05jZFnhLjK6a8VJUM1ZFWDYR0Y4OTRVDfXOU5STENCNZGSIQIQCN0PWcu&route=shorturl](https://forms.office.com/pages/responsepage.aspx?id=_6DKBnJlIqyMEVxNhtROCS-r05jZFnhLjK6a8VJUM1ZFWDYR0Y4OTRVDfXOU5STENCNZGSIQIQCN0PWcu&route=shorturl)

### プラットフォームのイメージ

#### 会員制の一般社団法人



#### 消費者・需要者への波及

#### プラットフォームの取組



### プラットフォーム設立に向けたスケジュール

#### プラットフォーム設立 (令和9年春頃)

**第1回設立準備協議会の開催**  
(R8.5.29)

- ・設立趣旨や運営体制、機能の概要を確認。
- ・具体化に向け、機能別WGで検討を進めることで一致。

**参加者の募集**  
(令和9年春頃～)

**プラットフォームの具体化**  
(協議会の下、3つのWGで検討)

**プラットフォーム  
設立準備協議会 設置** (本年5月末～)



# 森業キックオフ・フォーラム大盛況！

令和8年7月7日、東京都江東区新木場の木材会館において開催した「森業キックオフ・フォーラム」は、定員250名を大きく上回る応募があり、満席の会場に熱気が溢れる大盛況となりました。

## 満席の中、和やかなムードで開会！

森林浴やトレイルライド等の森林空間利用、林業体験や企業研修等のフィールド提供、J-クレジットや未利用資源の活用等、森林のもつ社会経済的価値や環境価値を活かした取組「森業」は、関係人口の創出・拡大、ウェルビーイングの向上、森林経営の収入源の多角化など、大きな可能性を持っており、今後の展開に期待が集まっています。本フォーラムは、こうした「森業」の地域経済への波及効果や今後の展望を広く共有するとともに、取組のさらなる拡大を図るためのキックオフイベントとして開催しました。

冒頭、司会を務めたフリーアナウンサーの富永美樹氏から、森で遊んでいた幼い頃の思い出や、富士山麓の森の中に家を建て、東京との二拠点生活を送られていることなど、ご自身と森との深い関わりについて紹介があり、フォーラムは和やかなムードで開会しました。

基調講演では、(一社)森と未来代表の小野なぎさ氏が、森林や山村地域を取り巻く現状や、本年6月5日に閣議決定された新たな森林・林業基本計画に「森業」が位置づけられた意義に触れながら、若い世代を中心に消費に対する価値観が「モノ」から「コト」「トキ」「イミ」へと変化する中、森林の価値を人・地域・社会へつなぐ「森業」を通じて、森と人との関係を再生したいというメッセージを発信しました。



小野なぎさ氏による基調講演



司会を務めた富永美樹氏

その後、先行して森業に取り組まれている全国各地のトップランナー11組による事例発表が行われました。林業経営と相まった森林空間利用、「木を伐らない林業」という逆転の発想によるアプローチ、森林レンタル、森林内での

|                                                                                                                            |                                                                                                                                           |                                                                                                                               |                                                                                                                     |                                                                                                                        |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <br><b>【司会】</b><br>フリーアナウンサー<br>富永 美樹 氏 | <br><b>【基調講演】</b><br>(一社) 森と未来<br>小野 なぎさ 氏             | <br><b>【モデレーター】</b><br>(株) モリアゲ<br>長野 麻子 氏 | <br>(株) リトル・トリ<br>大野 航輔 氏        | <br>(有) 天女山<br>小宮山 信吾 氏            |
| <br>(株) 武田林業<br>武田 惇奨 氏                 | <br>(株) シガミカンセンター<br>田口 房國 氏                           | <br>蔵王坊平観光協議会<br>桐生 貴法 氏                   | <br>TDKラムダ (株)<br>森山 さやか 氏       | <br>(合) サイクロス Wans Lough<br>小田 明 氏 |
| <br>陸前高田市<br>浦生 夏生 氏                    | <br>左) デクスウッド宮崎事業協同組合<br>川添 恵作 氏<br>右) (株) 良品計画 新井 亨 氏 | <br>(株) BASE TRES<br>松本 潤一郎 氏              | <br>(有) 森業ビジネスエージェンシー<br>鈴木 敦子 氏 |                                                                                                                        |



森業のトップランナーによるパネルディスカッション

愛犬向けサービス、森林を活用した企業研修、リジットや未利用資源の活用等、多彩な取組とその効果が次々と紹介されました。森業の裾野の広さを実感させる事例が揃い、聴講者がメモを取りながら聞き入る場面が随所に見られるなど、登壇者の熱意と聴講者の関心の高さが相まって、会場全体が熱気に包まれました。

## 活気あふれる。パネルディスカッション

続く(株)モリアゲ代表の長野麻子氏がモデレーターを務めるパネルディスカッションでは、事例発表にも登壇した大野航輔氏(株)リトル・トリー代表取締役、小菅村地域林政アドバイザー、武田博奨氏(株)武田林業代表取締役、森山さやか氏(TDKラムダ株)人事部人財グループマネージャー、蒲生夏生氏(陸前高田市農林課林政係長兼企画部脱炭素推進室主任)の4名がパネリストとして参加し、森業の可能性や今後の展望等について本音を交えたディスカッションが繰り広げられ、長野氏の軽快な進行のもと、笑いあり、熱論ありの活気あふれる時間となりました。

また、一般聴講者参加型のオープンマイクも、希望

者が、見込んでいた人数を大きく上回るなど、改めて森業への期待や関心の高さを感じることができました。文字数の関係でそれぞれのプログラムの詳細をお伝えできないのが残念ですが、当日の動画を左記QRコード「森業portal」で公開しておりますので、その熱量を是非ご体感ください。

なお、林野庁では、森業に取り組む企業や自治体、NPO等の顕彰と発信を通じて、森業に対する国民の理解を深め、更なる取組拡大につなげることを目的に、「森業アワード」を創設し、フォーラムと同日の7月7日(火)から募集を開始しました。「森業」のコンセプトに即した取組を広く募集しますので、奮って応募ください。

「森業」という新たなムーブメントは、いま確かに動き始めています。

### 森業portalの開設

これからの森業のポータルサイト

**森業 portal**

林野庁では、森林と人、森林と企業がつながっていく、そんな「森業」の情報発信ポータル「森業portal」を開設。



森林サービス産業推進地域や、企業による森林(もり)づくり、森林由来J-クレジットに関する情報のほか、「日本美しい森 お薦め国有林」などの情報を発信。

[https://www.rinya.maff.go.jp/j/sin\\_riyou/morigyo.html](https://www.rinya.maff.go.jp/j/sin_riyou/morigyo.html)

「森業」とは

Pick up 森業

森によれる

### 森業アワード大募集!!



森業アワードの応募はこちらのQRコードから

[https://www.rinya.maff.go.jp/j/sin\\_riyou/morigyo/morigyoaward.html](https://www.rinya.maff.go.jp/j/sin_riyou/morigyo/morigyoaward.html)



# 松くい虫被害対策の今

## 犯人は「松くい虫」？

みなさんは「松くい虫」という名前を聞いたことがありますか？松くい虫被害と聞くと、松くい虫というマツを食べる虫がマツを枯らしているように聞こえますね。じつは、そうではありません。

では、マツを枯らしている“本当の犯人”とは何なのでしょうか。

## マツを枯らす犯人の正体

“犯人”（病原体）は「マツノザイセンチュウ」という体長1ミリメートルにも満たない微小な生物（線虫の一種）です。



マツノザイセンチュウ



マツノマダラカミキリ

## 松くい虫被害の現状

この線虫がマツに侵入すると、マツの樹体内でさまざまな反応が生じ、幹の中での水の流れが阻害され、水が届かず萎れて枯れてしまいます。マツが枯れたあと、線虫は自力で新たなマツへ移動できません。

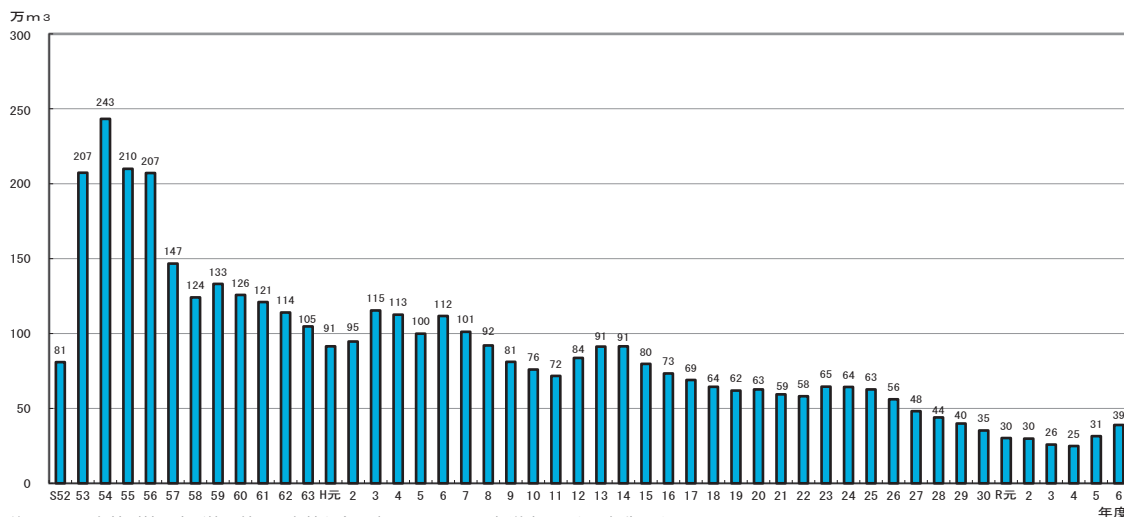
そこで“運び屋”（媒介者）として登場するのが「マツノマダラカミキリ」というカミキリムシ（以下、「カミキリ」）です。カミキリは、夏から秋にかけて線虫によって弱ったマツに産卵し、翌年、孵化したカミキリが成虫となって線虫を体内に入れて脱出します。

脱出したカミキリが新たなマツの枝を食べる際、カミキリに付着した線虫がそのマツに侵入します。

全国の松くい虫による被害を受けた木の量は、1979（昭和54）年に約243万立方メートルというピークを記録しました。その後、対策の強化により減少傾向が続いてきました。

ところがここ数年は被害の増加が見られるようになってきました。2023（令和5）年度には夏季の高温少雨等によって12年ぶりに被害が増加し、2024（令和6）年度も引き続き被害が増加しました。

全国の松くい虫被害量（被害材積）の推移



- 注 1 民有林（林野庁所管以外の国有林を含む。）については、都道府県からの報告による。  
 2 国有林（官行造林地を含む。）については、森林管理局からの報告による。  
 3 少数点以下第一位を四捨五入した。  
 4 四捨五入により、「都道府県別松くい虫被害量（被害材積）の推移（総数）」の合計値と一致しない場合がある。



海岸防災林（三保の松原（静岡県））

## 松林が果たす役割

松林は、美しい景色をつくるだけではありません。尾根沿い、岩場や乾燥が厳しい砂丘環境など、他の樹種が生育しにくい場所でも成長することができるマツは、長年私たち日本人の暮らしや営みを守ってきました。例えば海岸沿いの松林は「海岸防災林」として、津波の勢いを弱めたり、砂が飛ぶのを防いだりする大切な役割を担っています。また、景観や観光資源としての価値が期待される松林もあります。

## 松林を守る対策

松林を守るための対策をご紹介します。

左の表に示すように薬剤散布・樹幹注入等の予防と被害木を伐倒して処理する伐倒駆除があります。

薬剤散布は松の樹冠にあらかじめ農薬を撒き付けておいて、枝をかじったカミキリを死亡させる方法です。

樹幹注入は農薬をマツの幹に直接注入する方法で、周囲への農薬の影響を抑えながら、線虫が移動・増殖するのを防ぎます。

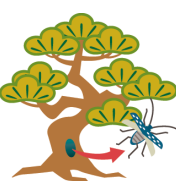
伐倒駆除は被害木を伐倒して、その中に生息するカミキリを木ごと処理して死滅させる方法です。薬剤を用いる「くん蒸処理」や細かく砕くなどの方法があります。

そのほかに、松くい虫被害に強い性質を持つマツの苗木を育て、被害を受けた場所に植え直す取組も進められています。薬だけに頼らず、強い松林をつくり直す長期的な視点の対策です。

## おわりに

変色したマツの木を見かけたら、それは松くい虫被害の兆候かもしれません。早期発見・早期対応が、松林を守る第一歩です。地域の松林は、防災、景観・文化の保全につながる大切な財産です。行政と住民が一緒に目を向けることで、未来の世代にも緑豊かな松林を引き継いでいきましょう。

### 松くい虫の被害発生メカニズムと防除手法

|   | (1) 発生メカニズム                                                                                                                 | (2) 防除手法                                                                                                                                                                                                          |
|---|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 春 |  <p>5月～7月に羽化したカミキリが線虫を体内に入れて樹体内から脱出</p>    | <p>&lt;薬剤散布による防除&gt; 春～</p>  <p>カミキリ成虫が羽化脱出後に健全なマツを後食し、線虫が樹体内に侵入するのを防ぐため、薬剤散布等を実施（航空機／地上）</p> <p>注）特別防除は防除実施基準に定められた地域に限って実施</p> |
| 夏 |  <p>カミキリ成虫がマツ若枝の皮を食べる（後食）時に、線虫が樹体内に侵入</p> | <p>&lt;伐倒駆除&gt; 秋～春 翌年の春までに実施</p>  <p>枯死したマツの樹体内のカミキリ幼虫を駆除するため、翌年春の羽化脱出前までに被害木を伐倒し、薬剤によるくん蒸や破碎・焼却等を実施</p>                      |
| 秋 |  <p>樹体内で線虫が増殖し、水分の通導を阻害してマツが衰弱</p>       |                                                                                                                                                                                                                   |
| 冬 |  <p>秋にかけて衰弱したマツにカミキリが産卵</p>              | <p>&lt;樹幹注入&gt; 冬</p>  <p>健全なマツの樹体内での線虫の増殖を防ぐため、薬剤を樹幹に注入<br/>※この他に、松林の健全度を高める林床整備等を通年で実施</p>                                   |

注1）被害の発生時期などは地域の気候等によって異なるため、おおよその季節を記載している。  
注2）「カミキリ」とは「マツノマダラカミキリ」を、「線虫」とは「マツノサイセンチュウ」のことをそれぞれ指す。

#### 【出典】

国立研究開発法人森林研究・整備機構 森林総合研究所  
「マツ材線虫病にどう対処するか ―防除対策の考え方と実践―」

<https://www.ffpri.go.jp/pubs/chukiseika/5th-chuukiseika11.html>



# 森林関連情報のオープンデータを公開しました

令和7年度から、基盤的な森林関連情報について、全国の民有林と国有林とを合わせた「全国統合データ」の整備・公開を開始しました。第一弾として、森林の所在を表す「森林計画対象森林レイヤ」、森林簿等に基づく樹種や林齢等の情報を表す「全国森林資源メッシュ」、一部地域の「航空レーザ測量データ」を公開しました。

## 1 これまでの経緯

森林・林業行政のために整備された森林簿などの森林資源に関連する情報（以下「森林関連情報」という。）には、森林所有者の氏名や住所、材積などが掲載されているものがあります。このため、森林関連情報の提供や公開は、これまで、それぞれの都道府県等が定めた個人情報保護条例に基づいて行われてきており、取組状況には非常に地域ごとの温度差がありました。

森林・林業を取り巻く情勢を見ると、戦後造成された人工林の多くが利用期を迎え、国産材の利用が進んでおり、林業や木材産業の事業活動の広域化が進んでいます。加えて、「2050年ネット・ゼロ」や「2030年ネイチャーポジティブ」の実現に向けて、地球温暖化防止や生物多様性の保全などの環境に配慮した取組が強く求められるようになっていきます。こうしたことを背景に、森林関連情報に対する社会のニーズは非常に高まっています。

また、政府全体として、地理空間情報の活用や流通の

促進を図っているほか、国や地方公共団体が保有する公共データについて、オープンデータとして公開する取組が進められています。さらに、地方公共団体等の個人情報取扱いについては、個人情報の保護に関する法律に一本化されました。

このような情勢を踏まえ、林野庁では、全国の森林関連情報をオープンデータとして公開を進めることとしました。

## 2 令和7年度に

### オープンデータ化した情報

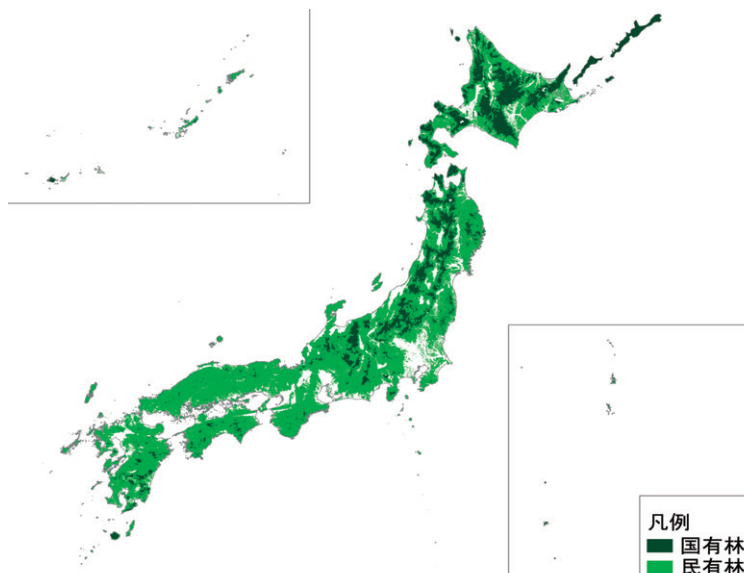
#### （1）森林計画対象森林レイヤ

森林法第5条に基づく地域森林計画の対象である民有林と同法第7条の2に基づく地域別森林計画の対象である国有林の情報を合わせた範囲を示すGISデータを公開しました。これまでは各機関から個別に入手する必要がありましたが、今回、全国統一したデータ仕様で利用することが可能になりました。

森林計画対象森林レイヤの属性情報

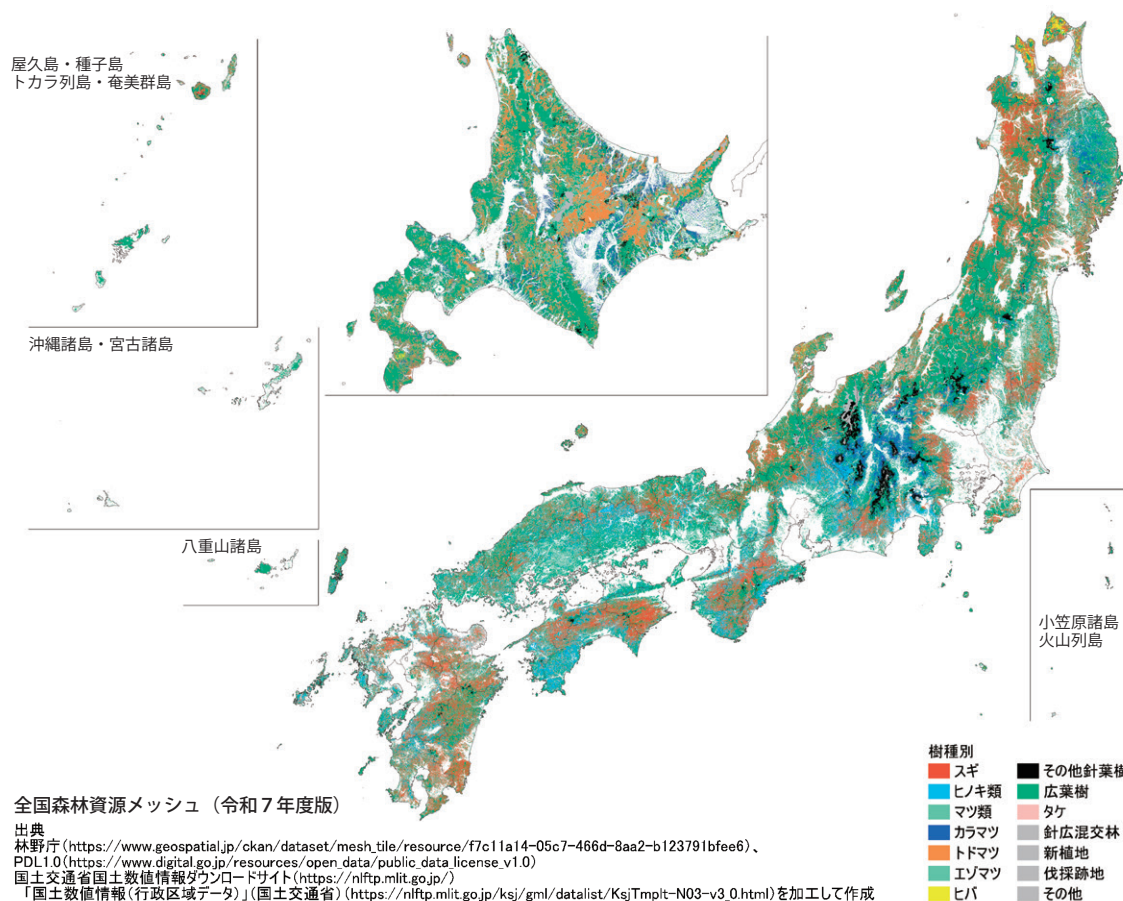
| 属性項目 |                 |
|------|-----------------|
| ①    | 森林管理局（国有林のみ）    |
| ②    | 森林管理署等名称（国有林のみ） |
| ③    | 森林計画区コード        |
| ④    | 森林計画区名称         |
| ⑤    | 林班              |
| ⑥    | 都道府県コード         |
| ⑦    | 都道府県名称          |
| ⑧    | 市町村コード3桁        |
| ⑨    | 市町村コード5桁        |
| ⑩    | 市町村名称           |
| ⑪    | 広域流域名称          |
| ⑫    | データ時点           |
| ⑬    | 民国別             |
| ⑭    | 旧市町村            |

森林計画対象森林レイヤ



## (2) 全国森林資源メッシュ

一辺20mのメッシュポリゴンに森林簿由来の資源情報を格納したGISデータを公開しました。航空レーザ計測・解析が完了している一部地域については、その解析情報も併せて格納しています。



これまで都道府県ごとに自由線形のポリゴンで管理されてきた情報を、今回メッシュ化したことで、地域横断的な分析が可能となるだけでなく、より効率的な森林関連情報の管理・更新が可能になることが期待されます。

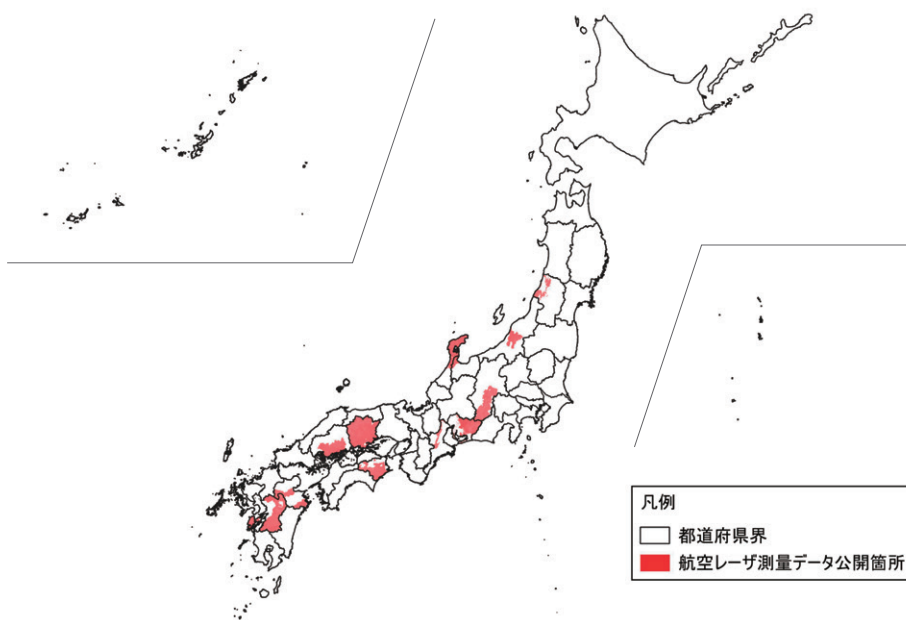
### 全国森林資源メッシュの属性情報

| 属性項目 |               |
|------|---------------|
| ①    | 林種            |
| ②    | 樹種 (最大第3樹種まで) |
| ③    | 林齢            |
| ④    | 森林簿年月日        |
| ⑤    | 樹冠高           |
| ⑥    | 解析樹種          |
| ⑦    | 立木密度          |
| ⑧    | 標高            |
| ⑨    | 計測年月日         |

## (3) 航空レーザ測量データ

下地図で着色している範囲について、林野庁や都道府県等が取得した航空レーザ測量成果を基に、地形の情報であるDEMデータやCS立体図のマップタイルなどを公開しました。このDEMデータは、現在、国土地理院が公開しているデータよりも高い解像度0.5mで公開しており、森林・林業分野だけでなく、防災・災害対応や古墳等の遺跡の探索などにも広く活用することができます。

### 令和7年度の公開範囲



## 3 おわりに

オープンデータ化を進めることにより、森林関連情報を有効に活用した事業活動等の展開だけでなく、民間における多様なサービスの創出等も期待されます。

今年度以降、順次「保安林」「山地災害危険地区」「林道」等の基盤的な森林関連情報を新たに公開するほか、航空レーザ測量データについて公開地域の拡大を図るとともに全国森林資源メッシュへの情報の格納を進めていきます。



在シアトル日本国総領事館  
領事 小杉 陵太

## 「常緑の州 (the Evergreen State)」 ワシントン州シアトルでの勤務

### 日本から最も近い 米国本土の都市、シアトル

東京から飛行機で約9時間、米国本土の主要都市の中で、日本に最も近い都市の一つが、ワシントン州シアトルです。昨年米国野球殿堂入りを果たされた鈴木イチロー氏が活躍されたチーム名「シアトル・マリナーズ」でこの地名をご存じの方も多いのではないのでしょうか。

産業としては、マイクロソフト社、アマゾン社のビッグ・テック2社がシアトル都市圏に本社を構え、グーグル社やメタ社もオフィスを設けるなど、情報通信分野が最も発達しています。また、ワシントン大学をはじめとしたトップレベルの研究機関も複数あり、産学を中心としたスタートアップ・エコシステムが形成されていることも大きな特徴です。シアトル都市圏には3,000ものスタートアップ企業があると言われており、その分野は情報通信のみならず、量子・核融合・生命科学など多岐にわたります。

さらに、世界を代表する航空機メーカー、ボーイング社もシアトルが発祥の地です。航空機部品の供給にあたっては日系企業も重要な役割を果たしており、787型機、通称「ドリームライナー」は、機体構造の約35%を日系企業が担っています。

そして、豊富な森林資源を有するこの地域では、開拓期以来、林業が主要産業として発展してきました。北米最大の林業会社、ウェアハウザー社もシアトルに本社を置いています。かつては日本向けに多くの丸太が輸出されるなど、日本とも深いかわりがありました。

### 米国北西部沿岸地域 における森林事情

シアトルのある北西部沿岸地域は、南部とともに、米国を代表する林業地域の一つです。ダグラスファー（ベイマツ）を始めとする豊富な針葉樹資源を有するとともに、東部に比べてヨーロッパ系移民の大規



マイクロソフト本社での日本文化発信



鈴木イチロー氏背番号「51」がセンターに書かれた芝生



ノースカスケード国立公園

模入植が遅かったことにより、手つかずの自然も多く残されています。また、シアトルの位置するワシントン州内には、ノース・カスケード国立公園、マウント・レーニア国立公園、オリンピック国立公園の3か所の国立公園があり、ハイカーにとって人気の州になっています。

一方、豊富な森林資源にもかかわらず近年は、国内の住宅ローン金利の高止まり・インフレによる住宅価格の高騰などに伴い、木材市場は奮わない状況が続いています。また、環境面では、森林火災の深刻化・激甚化が増しており、延焼の燃料となる過剰なバイオマスを減らす観点でも、積極的な森林管理を求める声が高まっています。また、二酸化炭素の吸収源としての森林の役割に注目が高まっております。カーボンクレジットの観点で森林に対する投資を

行う企業が増えており、特に、データセンタールの需要拡大による二酸化炭素排出量の増加への対策として、ビッグ・テックによる森林投資が増えつつあります。



森林投資会議への参加

## おわりに

シアトル総領事館では経済・文化・姉妹都市担当の領事として、幅広い分野に携わっています。シアトルには250の日本企業の事業所が所在しており、経済担当として、林業・木材産業のみならず、水産業や商社、流通業界など幅広い分野の方と意見交換を行っています。このほかにも州政府、大学、林業団体等との関係構築・情報収集にも動んでいます。また、文化担当として、「日本文化祭り」の企画や、現地

美術館・生け花や茶道等の日本文化に関連する団体との連携強化も行っています。加えて、姉妹都市担当として、当館管轄地域であるワシントン州、モンタナ州内の各地域と日本の各市町村等との間で結ばれている約40の姉妹都市連携に関し、周年事業への参加や、ネットワーキング等も行っています。

このように、多くのコミュニティ、地域と接する機会がありますが、様々な分野でシアトルが日本との深い繋がりにあることに日々驚いています。例えば、シアトルから車で3時間東に行ったモーゼスレイクという町では、日本からの農業研修生を毎年受け入れており、研修生は全米各地の農場に配属される前に、この町のコミュニティ・カレッジで語学や農業の基礎を学んでいます。その他にも、先述の姉妹都市に関する活動においては、学生交流をはじめとした草の根交流や、JET (Japan Exchange and Teaching) プログラムにおける日本の小中高등학교への外国語指導助手 (ALT: Assistant Language Teacher) 等の派遣など、多くの取組を通じて、多種多様な方が日米相互を訪問し、訪問側、受入れ側ともに文化に触れる機会があります。外交というと華やかな舞台をイメージされることもありますが、日米の強力なパートナーシップを支えているのは、こうした皆様の一人一人のつながりに基づくものだと、改めて実感しています。



研修生受入れ農場



姉妹都市記念式典での挨拶



# ICTを活用した 林業の省力化に向けて 「宮北署ICT推進室」

九州森林管理局 宮崎北部森林管理署

## はじめに

森林を適切に管理し、効率的な林業経営を行うためには、立木の材積や本数、林道からの距離などの情報を正確に把握することが欠かせません。しかし、これらの情報を収集する現地調査には多くの人手と時間を要するため、作業の省力化が課題となっています。宮崎北部森林管理署では、この課題を解決するため、令和4年度に若手職員を中心とした「宮北署ICT推進室」（以下、ICT推進室）を立ち上げ、技術の普及、自律型人材の育成、省力化の実現を進める取組を行っています。

## 技術の普及 ICTを活用できる技術者の育成

ICTを活用して作業の省力化を進めていくためには、技術を活用できる人材の育成が重要です。このため、署の職員の技術力向上に加え、林業大学校や林業事業体の技術研修等への支援に取り組んでいます。

## 署員の技術力向上

ICT推進室の立ち上げ以降、まずは署

員がICTへの知見を深めるため、各種技術研修を実施してきました。研修では、ICT機器の操作方法の習得に加え、従来手法との比較や機器ごとの特性の把握を行いました。その結果、客観的なデータに基づいて森林の状態を把握し、施業方針等を判断する能力の向上に繋がりました。

## みやざき林業大学校の研修生に対する講義

令和7年度は、宮崎県林業技術センターにおいて、みやざき林業大学校の長期課程研修生15名を対象に、「スマート林業に関する取組」と題した講義を実施しました。講義では、当署で活用しているICT機器の概要説明や操作実習、取得データの解析方法を紹介したところ、研修生から多くの質問が寄せられ、関心の高さがうかがえました。

## 林業事業体に対する研修会

宮崎県西臼杵支庁との共催により、西臼杵地区（高千穂町、日之影町、五ヶ瀬町）の林業事業体を対象とした「令和7年度西臼杵地区ICT現地研修会」を開催しました。研修会では、ICT機器を活用した森林資源調査の省力化をテーマに、機器の操作方法や調査事例の紹介、現地での実演を行

### 管内概要

#### 所在地

宮崎県日向市大字日知屋 17371-1

#### 区域面積

319千ha

うち森林面積 276千ha

うち国有林面積 33千ha

#### 関係自治体

2市5町2村

日向市、延岡市、門川町、美郷町、高千穂町、日之影町、五ヶ瀬町、諸塚村、椎葉村



宮崎北部森林管理署は、宮崎県の北部に位置し、管内は、北は大分県、西は熊本県、東は太平洋に面しています。管内の国有林の多くは源流域に位置し、全体の95%が水源かん養保安林であり、下流域の水がめとして、重要な役割を担っています。管内には、スギ、ヒノキの人工林の他、ブナ、ミズメ、ミズナラ等の天然林が多様な自然環境を形成しています。特に、祖母・傾・大崩山系周辺地域については、原生的な天然林が残されているだけでなく、山岳信仰が受け継がれていることや、竹細工や木工等の林産物の利用が盛んであることなどが評価され、ユネスコ・エコパークに登録されています。また、西部の山岳地帯は九州中央山地国定公園、東部の海岸部は日豊海岸国定公園に指定されています。



いました。研修会を契機としてICT機器の導入を検討する林業事業体も見られました。



署員が参加する技術研修



「みやざき林業大学校」での講義



「西臼杵地区ICT現地研修会」での市町村職員及び林業事業体への説明

## 自律型人材の育成 実践を通じた人材育成

ICTに関する知識や技術を習得した人材が、自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的に取り組む力を養うため、実際の業務や現場でICTを活用しながら実践的な経験を積む取組を進めました。

林道や林内の状況の確認は現場業務に不可欠である一方、多くの時間と労力を要します。そこで、署員から提案されたアイデアを基に、全天球カメラを活用して林道と周辺状況を一体的に撮影し、パソコン上で確認できる仕組みを作りました。現地確認



全天球画像撮影機器。林道を走行しながら林道・周辺状況を一体的に撮影

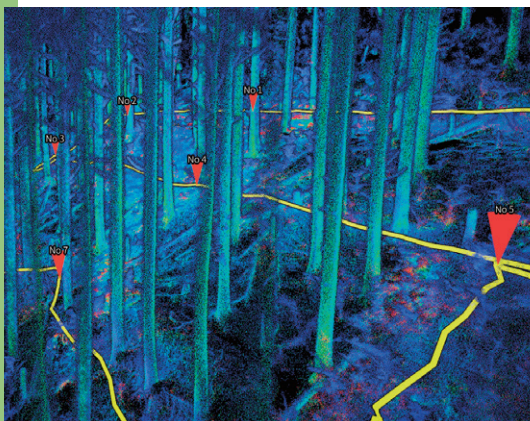
業務の効率化に加え、豪雨等による被害状況の把握への活用も期待されており、現在は試行運用しながら、効果や活用方法を検証しています。

## 省力化の実現 ICTを活用した林業の省力化

ICT推進室では、人材育成の成果を実際の業務へ結びつけるため、ICTを活用した森林調査や測量に取り組み、省力化を進めています。

令和7年度は、森林資源調査において、森林内の樹木の高さや太さを高精度で計測できる地上型3Dレーザを活用し、128haで調査を実施しました。また、森林の位置や境界等を把握するため、GNSS（衛星測位システム）を用いた測量を43haで実施しました。

作業効率を比較したところ、4人で行った



地上型3Dレーザを使用した森林資源調査の解析画像

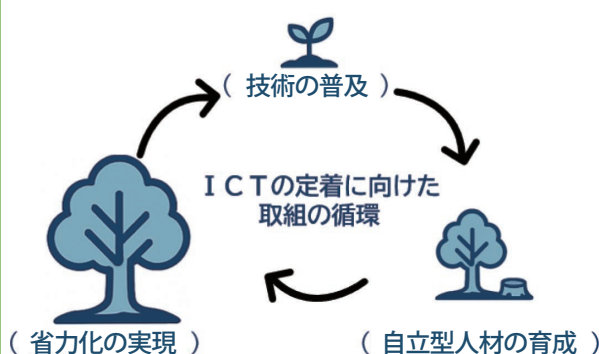
従来の輪尺や樹高計を用いた調査に比べて、ICT機器を活用し1人で行った調査は6割の時間で完了し、人員及び作業時間の大幅な削減につながることが確認されました。

## おわりに

ICT推進室では、今後とも、人材の育成と業務の効率化・省力化に向けた取組を継続し、ICTを活用した効率的な森林管理の実現を目指していきます。

また、得られた知見や成果を広く発信し、ICT活用の輪を広げることで、地域林業の発展につなげていきます。

### 「宮北署ICT推進室」の取組イメージ



# 04 NFI 第5期の調査結果について

林野庁では、全国の森林の状態やその変化の動向を把握するため、<sup>リョウボク</sup>立木や下層植生などを対象とした「森林生態系多様性基礎調査（NFI）」を実施しています。この調査は平成11年度に開始し、5年で全国を一巡するサイクルで継続的に行っており、現在は第6期の調査を進めています。

今年3月には、第5期（令和元～令和5年度）の調査結果を公開しました。本稿では、その概要をご紹介します。

## 第5期調査結果の主な概要

### ① 森林生態系タイプ

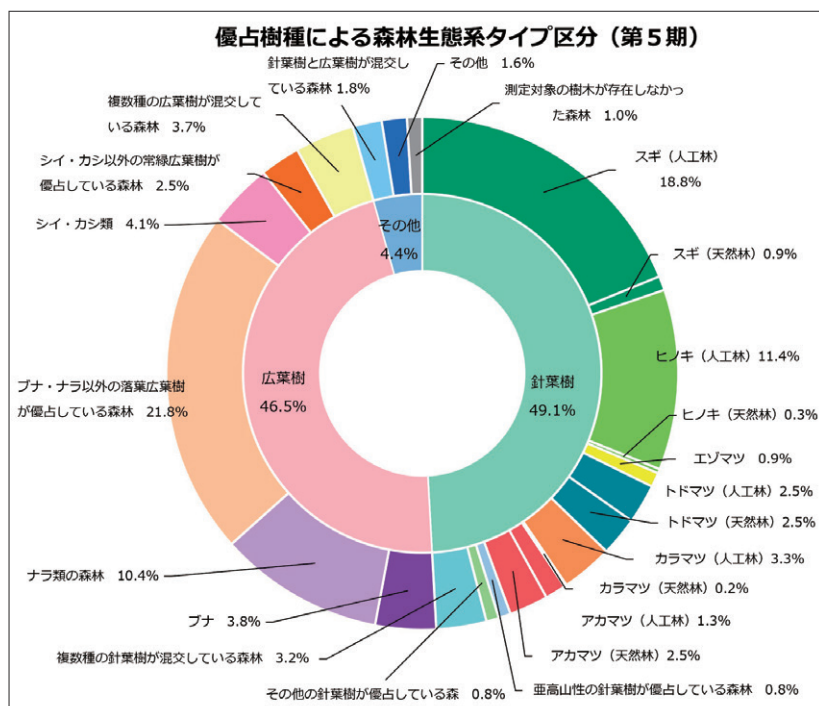
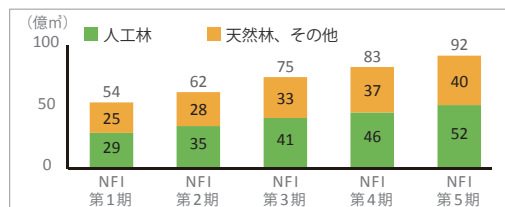
森林生態系の多様性を把握するため、優占樹種（各調査プロットにおいて、立木の幹の断面積の合計が全体の30%以上を占める樹種）に基づく森林生態系タイプを継続的に調査しています。日本の森林は「針葉樹が優占する森林」（円グラフ右側）と「広葉樹が優占する森林」（同左側）が同程度の割合を占めており、これまでに大きな変化はありません。

### ② 野生鳥獣による森林被害の状況

この調査では、野生動物による森林被害や生息の痕跡も記録しています。野生動物の中でもシカによる被害痕跡が確認された調査プロット数が最も多く、右記の分布図に示すように第4期から第5期にかけて、その数は増加しており、生息域の拡大が示唆されました。今後、より広い範囲の森林がシカの採食などの影響を受ける可能性があります。

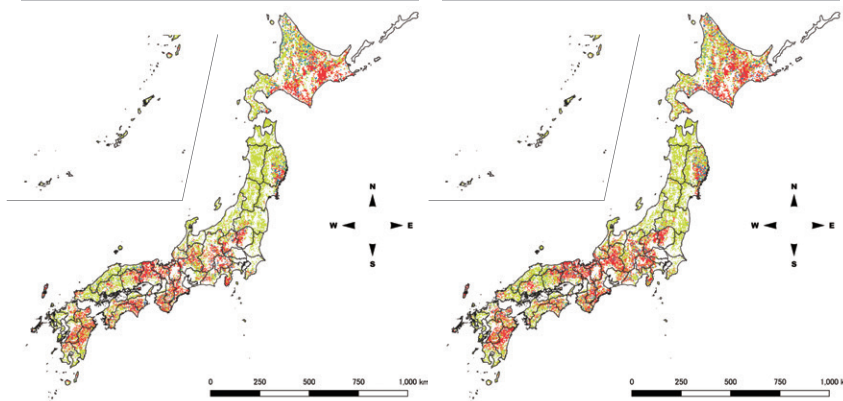
### ③ 森林蓄積

森林に生育する立木の幹の体積の総量を森林蓄積と言います。調査結果を基に全国の森林蓄積を推計したところ、第5期調査では約92億m<sup>3</sup>となり、下グラフに示すように我が国の森林蓄積は着実に増加していることが明らかになりました。



シカ被害の発生状況 第4期

シカ被害の発生状況 第5期



注1：NFIの調査結果に基づく森林の蓄積の推計値

注2：NFI第1期；H11～15年度、NFI第2期；H16～20年度、NFI第3期；H21～25年度、NFI第4期；H26～30年度、NFI第5期；R1～5年度

注3：計の不一致は、四捨五入による。

## 調査データの公開

第1期から第5期までの調査データについては、行政機関や研究機関をはじめ、多くの方に利用していただけるよう、「森林生態系多様性基礎調査」のウェブサイトで公開しています。調査プロットごとの集計データを確認できる「解析プログラム」のほか、単木情報（樹種、胸高直径、樹高など）や下層植生の植物種などの詳細なデータである「研究者等向けデータ」も公開していますので、同サイトの「データ利用ヘルプデスク」からデータダウンロード申請フォームにて申請の上、ぜひご活用ください。

森林生態系多様性基礎調査

<https://www.rinya.maff.go.jp/j/keikaku/tayouseichousa/index.html>



森林生態系多様性基礎調査 データ利用ヘルプデスク

<http://forestbio.jp/>



# みどりの大使 が行く!



...  
2026

ミス日本みどりの大使

ながた まなみ  
永田 愛実

皆さん、こんにちは。永田愛実です。

みどりの大使になる以前は森を見ると「自然がきれいだな」と感じるものがほとんどでしたが、大使としての取材や活動から色々学び、今では「何の木だろう」「誰が育てたのだろう」「どんな想いが込められているのだろう」と、その森が育まれてきた長い時間や、そこに関わる方々の姿を自然と思い浮かべるようになりました。森を見る視点が変化してきたことを実感しています。



## チェーンソー講習

神奈川県自然環境保全センターで、2日間にわたるチェーンソー特別教育を受講しました。受講者は、長年林業に携わっているベテランの方から、若い方まで様々でした。

座学では、チェーンソーの構造や点検・整備の方法、伐木作業の基礎知識、関係法令などについて学びました。その中で最も心に残ったのは「事故」についてのお話です。チェーンソーは使い方を誤ると危険な道具だということは知っていましたが、実際の事例やデータを見ると、林業の現場では想像以上に死傷事故が多く、何十年も林業に携わるベテランの方でも例外ではないと知り、とても驚きました。「慣れているから大丈夫」という考えは通用せず、どれだけ経験を積んでも、一瞬の気の緩みが大きな事故につながることを学びました。

講義後、正直「自分に扱えるのだろうか」と怖さが大きくなっていました。その時、先生がおっしゃった「怖いと思う気持ちは悪いことではない。その怖さを忘れてしまうことの方が危ない。」という言葉が今でも



心に残っています。不安な気持ちは決して弱さではなく、安全に作業するために必要な感覚なのだと思えました。だからこそ、一つ一つの手順を確認し、焦らず、基本を大切にすることが何より重要なだと学びました。

初めてチェーンソーを動かした時は、エンジン音や手に伝わる振動にとっても緊張し、実技が終わった後もしばらく手の震えが止まらなかった。ですが、その緊張感があつたからこそ、一つ一つの動作を慎重に確認しながら取り組むことができたのだと思います。今回の体験を通して、現場でチェーンソーを使いこなす、安全第一に作業されている林業従事者の皆さんの技術や安全への意識、責任感の大きさを改めて実感し、尊敬の気持ちでいっぱいです。チェーンソーの扱い方だけでなく、安全を最優先に考える姿勢を学んだ貴重な2日間となりました。

## 愛実のつなぐ・届ける・森の声

### 「自分の姿を見せて仕事をしろ」

この言葉は、林材業安全技能師範の目時敬之先生の言葉です。最初は、「どういう意味だろうか?」と不思議に思いました。お話を伺うと、チェーンソー作業で着用する鮮やかなオレンジ色の作業服には、森の中でも周囲の人達から自分の居場所が分かるようにするという大切な役割があるそうです。目立つ色には、仲間同士がお互いの安全を守るという意味が込められていました。森の仕事は一人で没頭するのではなく、仲間の存在を確認しながら進めることが大切なのだと思えました。森づくりは、担い手の方々が自らの命を守るための知恵や安全への工夫によって支えられていることを実感しました。



「もしも」の備えで  
森と未来に安心を

# 森林保険

Forestry Insurance

山火事や大雨、大雪など8種類の災害に備えるセーフティネット

森林保険公式キャラクター  
たもちい  
Tamochi

森林保険公式キャラクター  
そよりん  
Soyorin

保険金のお支払いの対象となる8種類の災害



火災



風害



水害



雪害



干害



凍害



潮害



噴火災



国立研究開発法人森林研究・整備機構 森林保険センター  
URL: <https://www.ffpri.go.jp/fic/>

WEBサイト▶



情報誌「林野」  
ウェブアンケート  
にご協力をお願いします!

